

【原著】 松本歯学 8 : 63-69, 1982

歯科教育における技術適応能力診断の方法論的研究  
第5報 松本歯科大学衛生学院生徒のCPI年度の推移と  
YG性格検査について

丸山寛子, 小林美樹, 清水みや子  
谷内秀寿, 坂口賢司, 橋口緯徳

松本歯科大学衛生学院 (学院長 橋口緯徳 教授)

A Methodological Study on Technical Aptitude Ability Survey  
in Dental Education

Fifth Report : Annual change of CPI and YG Character test  
of the students of Matsumoto Dental College, Dental  
Hygienist and Technician School

HIROKO MARUYAMA, MIKI KOBAYASHI, MIYAKO SHIMIZU  
HIDETOSHI TANIUCHI, KENJI SAKAGUCHI, HIROYOSHI HASHIGUCHI

*Matsumoto Dental College, Dental Hygienist and Technician School  
(Principal Prof. : H. Hashiguchi)*

Summary

In dental medicine, being an excellent member of society is required as much as being skilled in medical technics. The following reports were made : First Report : The technical ability and the skill ability of the students in Dental Hygienist and Technician School, Second Report : About the California Psychological Inventory (CPI), Third Report : A comparative study of the technical ability and the result from CPI, Fourth Report : Annual change of technical ability and skill ability.

On this report, the annual changes in CPI, and also in YG Character test, between the freshman of Dental Hygienist and Dental Technician School in the year of 1980 and 1981 were compared. Furthermore, we made another comparison in CPI and YG between each classes.

Results were as follows : As for the annual change of CPI in 1980 and 1981, a small change was seen in each 18 grades but almost no change was seen in each group.

The particular feature of the changes in each class was the upward tendency in Sp (Social Presence), AI (Achievement via Independence), Ie (Intellectual Efficiency), Fx (Flexibility) seen in the 2nd graders of Technician Class.

It was believed that this tendency owed to the education based on technical skill, consequently making the students inured to studies.

Another feature was the upper tendency of Cm (Communality) in Hygienist Class contrasting with the downward tendency in Technician Class. It was considered that the upper tendency in the former class was an effect from personal relationship in clinical practice, and the downward tendency in the latter class might be, for one reason, because of its special field as a technical practice which compelled the technicians in a closed circumstances.

1. 結 言

歯科医療に携わる者は、歯科医療技術、技能力は勿論のこと1人の社会人としても優れていなければならない。この事柄は歯科医療人にとっては、避けて通ることのできない重要な問題である。しかしこの問題をどのような面からとらえるかは非常にむずかしい。そのためかこの事に関しては豊富なデータに基づき、科学的に比較検討した研究は我国においてはほとんどないと言っても過言ではない。そこで我々は松本歯科大学衛生学院生を対象として、第1報で技術力、技能力について<sup>1)</sup>、第2報で人格検査<sup>2)</sup>、第3報で技術力と人格

検査との比較<sup>3)</sup>、第4報では技術力と技能力の経年的観察<sup>4)</sup>を行い比較検討し、その結果を報告して来た。

今回はこの際人格テストとしてはカリフォルニア人格検査 (CPI)<sup>5)6)</sup>を、性格テストとして矢田部ギルフォード性格検査 (YG性格検査)<sup>7)</sup>を採用して、昭和56年度生、歯科衛生士科1年 (H<sub>1</sub>) 33名、歯科衛生士科2年 (H<sub>2</sub>) 35名、歯科技工士科1年 (T<sub>1</sub>) 23名、歯科技工士科2年 (T<sub>2</sub>) 21名、歯科衛生士科 (H) 68名、歯科技工士科 (T) 44名、計112名を対象に行い統計学的に比較検討してみた。また、CPIにおいては昭和55年度における成績結果とも比較検討し、同一クラスの年度の推

表1：YG性格検査項目とプロフィール類型

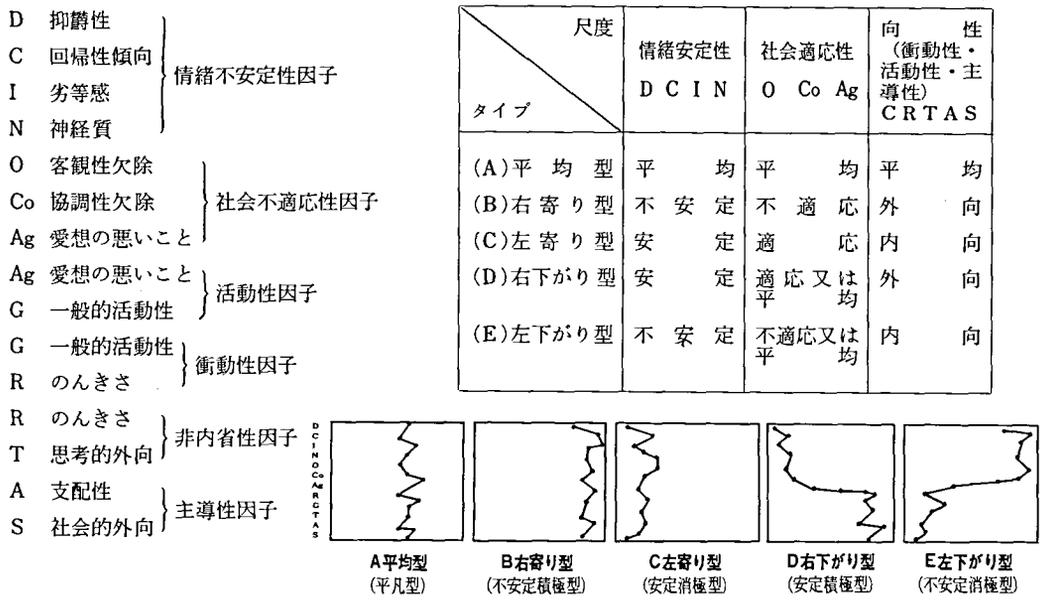


表2：カリフォルニア人格検査の平均値と標準偏差  
(S55年度)

項目 クラス別		1 群						2 群						3 群			4 群			
		Do	Cs	Sy	Sp	Sa	Wb	Re	So	Sc	To	Gi	Cm	Ac	Ai	Ic	Py	Fx	Fe	
H <sub>1</sub>	35名	$\bar{x}$	38	36	43	41	42	40	41	51	47	45	48	24	38	50	42	43	56	50
		$\sigma$	4.4	3.2	4.9	5.6	3.3	3.3	4.2	4.1	5.8	3.2	5.3	2.7	3.8	3.0	3.4	2.2	3.9	2.5
H <sub>2</sub>	29名	$\bar{x}$	41	36	40	43	42	40	41	51	50	45	50	33	38	50	42	46	56	50
		$\sigma$	5.0	3.4	5.3	6.1	4.1	4.9	2.8	5.1	5.5	4.0	5.9	1.8	4.8	2.8	3.6	2.2	3.1	2.8
T <sub>1</sub>	22名	$\bar{x}$	39	39	41	44	47	34	36	42	46	42	45	39	38	46	36	46	53	52
		$\sigma$	5.7	3.4	5.2	6.8	3.5	5.5	5.0	7.8	6.7	4.4	5.7	2.9	4.4	3.2	4.9	2.1	4.3	3.4
T <sub>2</sub>	23名	$\bar{x}$	42	39	45	46	49	36	38	49	46	46	50	35	38	48	45	46	53	52
		$\sigma$	6.2	3.4	5.3	6.4	3.7	6.4	5.4	4.9	8.0	4.3	6.5	2.2	5.5	3.5	4.8	2.9	3.9	2.9

H	64名	$\bar{x}$	39.5	36	41.5	42	42	40	41	51	48.5	45	49	33	38	50	42	44.5	56	50
		$\sigma$	4.7	3.3	5.1	5.9	3.7	4.1	3.7	4.6	5.7	3.6	5.6	2.3	4.3	2.9	3.5	2.3	3.6	2.7
T	55名	$\bar{x}$	40.5	39	43	45	48	35	37	45.5	46	44	47.5	33	38	47	40.5	46	54.5	52
		$\sigma$	6.0	3.4	5.3	6.6	3.6	6.0	5.2	6.8	7.4	4.4	6.3	2.6	5.0	3.4	5.2	2.6	4.0	2.5

(S56年度)

項目 クラス別		1 群						2 群						3 群			4 群			
		Do	Cs	Sy	Sp	Sa	Wb	Re	So	Sc	To	Gi	Cm	AC	Ai	Ie	Py	Fx	Fe	
H <sub>1</sub>	33名	$\bar{x}$	41	40	42	44	44	40	46	53	51	47	53	35	42	50	42	45	56	51
		$\sigma$	8.0	10.1	10.4	9.2	10.8	8.9	6.9	7.7	7.5	6.4	9.8	11.2	10.5	7.4	8.7	10.2	10.1	7.8
H <sub>2</sub>	35名	$\bar{x}$	39	37	41	44	44	39	40	52	48	45	47	37	38	51	41	43	57	48
		$\sigma$	8.4	8.3	10.9	8.5	9.8	8.7	8.1	7.4	10.3	8.1	9.9	10.6	8.7	9.0	8.0	8.2	11.5	7.5
T <sub>1</sub>	23名	$\bar{x}$	38	34	41	41	45	37	41	50	49	45	47	30	39	52	38	49	59	54
		$\sigma$	8.9	9.4	13.0	11.9	8.6	12.8	7.5	10.1	7.2	8.5	9.9	10.2	8.9	9.0	10.6	9.0	11.7	8.2
T <sub>2</sub>	21名	$\bar{x}$	40	39	42	48	49	37	35	46	45	45	48	32	39	52	40	49	61	55
		$\sigma$	10.6	8.0	9.6	9.6	6.5	11.3	7.2	8.0	9.7	9.5	9.1	12.0	7.1	9.5	9.4	8.3	14.4	7.4

H	68名	$\bar{x}$	40	39	41	44	44	39	43	53	49	46	50	36	40	51	42	44	57	50
		$\sigma$	8.3	9.4	10.7	8.8	10.3	8.8	8.1	7.6	9.2	7.4	10.4	11.0	9.8	8.3	8.4	9.3	10.9	7.7
T	44名	$\bar{x}$	39	37	41	44	47	37	38	48	47	45	48	31	39	52	39	49	60	54
		$\sigma$	9.8	9.0	11.5	11.6	7.9	12.1	7.8	9.4	8.7	9.0	9.6	11.1	8.1	9.3	10.1	8.7	13.1	7.8

移も観察して考察を試みた。

2. 方法

① CPI は第2報で既に報告した方法で行い、平均 ( $\bar{x}$ )、標準偏差 ( $\sigma$ )、変動係数 (Cv) を求めた。

② YG性格検査は質問項目が120あり、ハイ、イエエ、どちらでもないの3つの答えから1つを選び解答する質問紙法による性格検査である。この質問項目は12の性格特性にまとめられ、さらに6つの因子に集約される。粗点結果をプロフィール判定基準に記入すると、A類(平均型)、B類(不安定積極型)、C類(安定消極型)、D類(安定積極型)、E類(不安定消極型)の5類型に分類され、個人の性格特性の概要が判定される(表1)。

3. 成績

① 56年度のCPIの各尺度においてH<sub>1</sub>は $\bar{x}$ が35~56の間にあり、 $\sigma$ は6.4~11.2の間にあった。H<sub>2</sub>は $\bar{x}$ が37~57、 $\sigma$ が7.4~11.5、T<sub>1</sub>は $\bar{x}$ が30~59、 $\sigma$ が7.2~13.0、T<sub>2</sub>は $\bar{x}$ が32~61、 $\sigma$ が6.5

表3：カリフォルニア人格検査の平均値と標準偏差および変動係数

(S56年度)

クラス別	項目	1群	2群	3群	4群	全体
H <sub>1</sub> (33名)	$\bar{x}$	41.78	47.60	44.90	50.54	45.70
	$\sigma$	7.23	4.97	7.70	4.60	4.76
	Cv	0.17	0.10	0.17	0.09	0.10
H <sub>2</sub> (35名)	$\bar{x}$	40.46	44.84	43.58	49.38	43.93
	$\sigma$	7.74	5.30	6.70	6.04	4.51
	Cv	0.19	0.12	0.15	0.12	0.10
H (68名)	$\bar{x}$	41.10	46.18	44.22	49.74	44.79
	$\sigma$	7.38	5.33	7.23	5.42	4.72
	Cv	0.18	0.12	0.16	0.11	0.11

T <sub>1</sub> (23名)	$\bar{x}$	39.28	43.53	43.13	53.94	43.78
	$\sigma$	8.56	6.69	8.12	6.00	5.53
	Cv	0.22	0.15	0.19	0.11	0.13
T <sub>2</sub> (21名)	$\bar{x}$	42.65	41.94	43.63	55.02	44.94
	$\sigma$	6.58	5.62	6.41	7.15	4.39
	Cv	0.15	0.13	0.15	0.13	0.10
T (44名)	$\bar{x}$	41.12	40.89	43.37	54.46	44.33
	$\sigma$	7.95	7.86	7.36	6.60	5.05
	Cv	0.20	0.19	0.17	0.12	0.11

~14.4の間にあった。Hでは $\bar{x}$ が36~57、 $\sigma$ が7.4~11.0、Tでは $\bar{x}$ が31~60、 $\sigma$ が7.8~13.1の間にあった(表2)。尺度群別においてはH<sub>1</sub>の $\bar{x}$ は41.78~50.54の間にあり、 $\sigma$ は4.60~7.70、Cvは0.09~0.17の間にあった。H<sub>2</sub>は $\bar{x}$ が40.46~49.38、 $\sigma$ が5.30~7.74、Cvが0.12~0.19、T<sub>1</sub>は $\bar{x}$ が39.28~53.94、 $\sigma$ が6.00~8.56、Cvが0.11~0.22、T<sub>2</sub>は $\bar{x}$ が41.94~55.02、 $\sigma$ が5.62~7.15、Cvが0.13~0.15の間にあった。Hでは $\bar{x}$ が41.10~49.74、 $\sigma$ が5.33~7.38、Cvが0.11~0.18の間にあり、Tでは $\bar{x}$ が40.89~54.46、 $\sigma$ が6.60~7.95、Cvが0.12~0.20の間にあった(表3)。

昭和55,56年度の同一クラスにおけるCPIを全体でみると、H<sub>1</sub>は $\bar{x}$ が43.45、 $\sigma$ が4.19、Cvが0.10であり、H<sub>2</sub>は $\bar{x}$ が43.93、 $\sigma$ が4.51、Cvが0.10であった。T<sub>1</sub>は $\bar{x}$ が41.96、 $\sigma$ が5.92、Cvが0.14

表4：カリフォルニア人格検査の同一クラスにおけるS55年、56年度の比較

クラス別	項目	1群	2群	3群	4群	全体
H <sub>1</sub> (S55)	$\bar{x}$	39.59	44.02	43.70	49.78	43.45
	$\sigma$	6.58	5.63	5.00	4.97	4.19
	Cv	0.17	0.13	0.11	0.10	0.10
H <sub>2</sub> (S56)	$\bar{x}$	40.46	44.84	43.58	49.38	43.93
	$\sigma$	7.74	5.30	6.70	6.04	4.51
	Cv	0.19	0.12	0.15	0.12	0.10

T <sub>1</sub> (S55)	$\bar{x}$	40.30	39.80	39.90	51.50	41.96
	$\sigma$	7.43	8.55	7.62	5.37	5.92
	Cv	0.18	0.21	0.20	0.10	0.14
T <sub>2</sub> (S56)	$\bar{x}$	42.65	41.94	43.63	55.02	44.94
	$\sigma$	6.58	5.62	6.41	7.15	4.39
	Cv	0.15	0.13	0.15	0.13	0.10

表5：YG検査5類型における各クラス別の比率 (S56年度)

クラス	類型	A	B	C	D	E
H <sub>1</sub>	H <sub>1</sub>	36.4	21.2	0	42.4	0
	H <sub>2</sub>	20.0	31.4	8.6	34.3	5.7
T <sub>1</sub>	T <sub>1</sub>	21.7	13.0	21.7	39.1	4.3
	T <sub>2</sub>	23.8	9.5	9.5	47.6	9.5

小数点第2位を四捨五入数字は%を示す

であり、 $T_2$  は  $\bar{x}$  が 44.94,  $\sigma$  が 4.39,  $Cv$  が 0.10 であった (表 4)。

② YG 性格検査における各クラスに占める分類比率は、A 類型が 20~36.4% の間にあり、全体で 25.9% であった。B 類型は 9.5~31.4% の間にあり、全体で 20.5% であった。C 類型は 0~21.7% の間にあり、全体で 8.9%、D 類型は 34.3~47.6%、全体で 40.2%、E 類型では 0~9.5%、全体で 4.5% であった (表 5)。

#### 4. 考 察

CPI, YG 性格検査の規準に基づいて考察をしてみたところ、56年度 CPI の成績結果の観察から、歯科衛生士科において社会的成就能力、責任感、自己顕示性、順応的な成就欲求に僅少ではあるが  $H_1$  の方が  $H_2$  よりも高得点である事が認められた。この事柄について考えると、 $H_2$  に比較して  $H_1$  の方が能動的、自発的、冒険的、社交的、進歩的であり、多才で視野と関心に幅があり、責任感が強く、誠実、援助的、協調的、計画性があり堅実、勤勉で能率的である傾向が強いと推察される。 $H_2$  は  $H_1$  に比較すると無関心で視野、関心が狭く、用心深く冷淡であり、独断的で、強情、粗野であり、憶病、不安定で職業に悲観的であり、慣習的、抑制的、実直ではあるが衝動的側面を持っているのではないかと窺い知れる。歯科技工士科においては、社会的成就能力、社会的安定感、自己満足感に  $T_2$  が  $T_1$  よりも高得点であり、責任感、社会的成熟性、自己統制力に  $T_1$  が  $T_2$  よりも高得点であることが認められた。この事は  $T_1$  に比較して  $T_2$  の方が、能動的で活発、洞察力、想像力、表現力、説得力があり、自信家ではあるが利己主義的、個人的偏見が強く、強情、頑固、反抗的で行動は顕示的、誇示的で、怠惰、移り気で自己中心的で抑制に欠ける傾向が強いと思われる。 $T_1$  は  $T_2$  に比較して優柔不断で思考、判断に融通性がなく、視野が狭く、依存的、慣習的、受動的で内気であるが、計画性があり責任感が強く、熱心、誠実、忍耐力があり、自制的、慎重、質素であり、良心的で道徳の問題に敏感である傾向が強いのではないかとと思われる。全体的にみると各クラス共に社会的常識性が特に低い値であることが認められた。この事は他の人格尺度に比較して全体的に神経質で落ち着きなく、想像力には富むが

移り気の傾向がある。無秩序で忘れっぽい面があり、内的葛藤と悩みを持っている傾向があると思われる。

同一クラスにおける年度的推移を観察すると、歯科衛生士科の社会的常識性に顕著な上昇が認められた。この事は節度を守り気転がきき、しんぼう強く堅固で現実的、良心的で良識と是非の判断力が向上したものと考えられる。これは生活環境の変化、専門教育、臨床実習における対人関係の影響等が望ましい効果を与えた結果ではないかと思われる。歯科技工士科は社会的安定感、社会的成熟性、自立的な成就欲求、融通性に上昇が、社会的常識性に下降が認められた。この事は洞察力、想像力に富み、自発的、能動的、大胆で自信があり、勤勉、誠実で社会的に成熟し気力があり、表現に富みユーモラスであるが、利己主義的、支配的、強要的、独断的、反抗的であり、無秩序で神経質、短気であり、移り気で個人的楽しみや気晴らしに強い関心を持つ傾向が高くなったのではないかと考えられる。これは生活環境の変化や技術を主とした学業に対する慣れ、1年間の高度な課程を履修したという自信をもつ反面、技工実習という特殊な分野により閉鎖的な孤独な時間を強いられていること等が要因をなすのではないかと推察される。YG 性格検査について全体的にみると約 7 割の者には問題点はないと認められるが、活動的、外向的ではあるが情緒不安定で人格の不均衡が外へ現われやすく、暴発的行動に出やすい傾向を持つ者が 23 人、物静かで安定しているが消極的、内向的な者が 10 人、情緒不安定で非活動的、内向的でノイローゼ傾向の強い者が 5 人と約 3 割を占めた。この点に関しては検査結果において、これらに属した者には特に注意して観察してみる必要を感じる。その面からも現実にもこのデータのもつ意味が裏づけられるかもしれない。もし必要があれば今後の教育、指導によって最終目的である歯科医療人として適性をもった人格になるように努力すべきと思われる。各クラスについて見ると、歯科衛生士科においては  $H_1$  の方が情緒的に安定し、社会的適応性が高く、活動的で対人関係がうまく行く理想的な者、万事につけて調和的、適応的な平均型の者の占める比率が高く、逆に  $H_2$  は情緒不安定で活動的、人格の不均衡が現われやすい者、安定はしているが消極的、内向的な

者、情緒不安定、非活動的、内向的な者の占める比率が高く、CPIの成績結果と同様の傾向を読み取る事ができる。歯科技工士の $T_1$ 、 $T_2$ の関係は歯科衛生士の $H_1$ 、 $H_2$ の関係とほぼ逆の関係にあり、CPIと同様の傾向にあった。この事について考えるとCPIとYG性格検査間には類似点が多く、集団的性格、全体像を知ろうとすると同様の結果を得られる可能性が多いのではないかとと思われる。また、個人に対しても同じ様な人格傾向を知る事ができると推察されるが、これらの事柄に関しては今後の課題としたい。

## 5. 総 括

昭和56年度松本歯科大学衛生学院生を対象にCPI、YG性格検査を行ない比較検討した。次いで昭和55年度のCPIの成績結果とも比較検討し同一クラスの年度的推移も観察したところ次のような結果が得られた。

昭和56年度のCPIにおいてまとめてみると、

① 全体でみると各クラス間において、ほぼ同じような得点が認められた。

② 各尺度において、各クラス共に社会的常識性に最も低い値が、融通性に最も高い値が認められた。

③  $H_1$ 、 $H_2$ において各尺度を総合的にみると、僅少ではあるが $H_1$ の方が $H_2$ より高得点化の傾向を示し、その中で社会的成就能力、責任感、自己顕示性、順応的な成就欲求における得点差が大きい事が認められた。

④  $T_1$ 、 $T_2$ において各尺度を総合的にみると、社会的成就能力、社会的安定感、自己満足感で $T_2$ の方に高得点化が、責任感、社会的成熟性、自己統制力では $T_1$ の方に高得点化が認められた。

⑤ 尺度群別において、各クラス共に知的な型および興味様式での値が最も高く、 $H_1$ 、 $H_2$ 、 $T_1$ は心的安定感、優越性、自信の程度で、 $T_2$ は社会化、成熟性、責任感の程度での値が最も低いことが認められた。

昭和55、56年度のCPIでの同一クラスの比較においてまとめてみると、

⑥ 全体、群別において観察すると、歯科衛生士科ではほとんど変化が認められず、歯科技工士

科で全体、各尺度群にわずかではあるが年度的に高得点化の傾向が認められた。

⑦ 各尺度を総合的にみると歯科衛生士科において社会的常識性で年度的に高得点化が、歯科技工士科においては社会的安定感、社会的成就性、自立的な成就欲求、融通性で年度的に高得点化が、社会的常識性で年度的に得点の低下傾向が認められた。

YG性格検査においてまとめてみると、

⑧ 全体ではA類型25.9%、B類型20.5%、C類型8.9%、D類型40.2%、E類型4.5%の比率が認められた。

⑨ 各クラスにおいてはD類型に属する者が最も多かったが、各類型に関する比率の順位傾向は認められなかった。

⑩ 歯科衛生士科において、 $H_1$ の方が $H_2$ よりD、A類型に占める比率が高く、 $H_2$ は $H_1$ よりB、C、E類型での比率が高い事が認められた。歯科技工士科においては $T_2$ の方が $T_1$ よりもD、A、E類型の比率が高く、 $T_1$ は $T_2$ よりもB、C類型で高い比率が認められた。

以上をまとめると、今回の試みにおいては各クラス間に総合的な人格的差異はほとんどないと考えられるが、個々のクラスにおける個性、特性の存在を知る事ができるのではないかとと思われる。専門教育は人格を変化させる一因と成り得るものであり、人格に与える影響は人格構成尺度によって差異があり、その現われ方は教育内容によって異なるのではないかとと思われる。YG性格検査とCPIには類似性があり、同一個人、集団の性格検査、特性の検査に対してほぼ同様の結果および傾向を表示するのではないかとと思われる。これらの事柄については今後も継続して比較検討していきたいと考えている。

## 参 考 文 献

- 1) 橋口緯徳, 谷内秀寿, 坂口賢司(1981) 歯科教育における技術適応能力診断の方法論的研究, 第1報 松本歯科大学衛生学院生徒の技術力, 技能力について. 日歯技工会誌, 2(1): 45-51.
- 2) 丸山寛子, 小林美樹, 清水みや子, 橋口緯徳(1981) 歯科教育における技術適応能力診断の方法論的研究, 第2報 松本歯科大学衛生学院生徒の人格検

- 査. 松本歯学, 7(1): 95—103.
- 3) 谷内秀寿, 丸山寛子, 小林美樹, 清水みや子, 坂口賢司, 橋口緯徳 (1981) 歯科教育における技術適応能力診断の方法論的研究, 第3報 松本歯科大学衛生学院生徒の技術能力と人格検査との比較. 松本歯学, 7(1): 104—110.
  - 4) 谷内秀寿, 坂口賢司, 橋口緯徳 (1982) 歯科教育における技術適応能力診断の方法論的研究, 第4報 技術力と技能力の経年的観察(1). 日歯技工会誌, 3(1): 68—73.
  - 5) Gough, H. (1959) California Psychological Inventory, Consulting Psychologists Press, California.
  - 6) 我妻 洋, 川口茂雄, 白倉憲二 (1980) カリフォルニア人格検査・実施手引 (第3版), 誠信書房, 東京.
  - 7) 辻岡美延 (1982) YG 性格検査実施手引, 日本・心理テスト, 大阪.
  - 8) 辻岡美延 (1965) 新性格検査法・YG 性格検査実施応用研究手引, 日本・心理テスト研究所, 大阪.
  - 9) 肥田野直, 瀬谷正敏, 大川信明 (1979) 心理教育統計学, 培風館, 東京.
  - 10) 佐和隆光 (1979) 初等統計解析, 新曜社, 東京.
  - 11) 牧野都治 (1974) 統計の知識, 森北出版株式会社, 東京.
  - 12) 辰野千寿 (1968) 心理学 (系統看護学講座29), 医学書院, 東京.